古代語における動詞連体形節内の格付与について*

柳田優子
筑波大学

万葉集、平安初期の訓点資料の調査から、上代語には２つの重要な特徴がある。１）他動詞の主語と非能格動詞の主語は「ガ」によって標示されるが、非対格動詞の主語は「ガ」で標示されない。さらに「ガ」で標示された要素は外項主語位置から移動できない。２）「ヲ」は他動詞の目的語と非対格動詞の主語を標示することができ、さらに標示された要素は常に動詞句の外へ強制移動する。この語順の制約は古代語が「統語的能格言語」に属することを強く示唆する。本研究では連体形動詞をとる主文と従属節に焦点をあてそれぞれの節内の格付与について考察する。

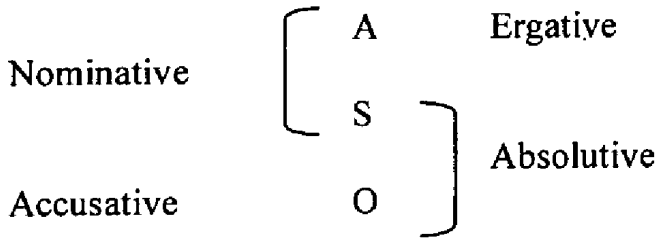
1. はじめに

本研究では連体形動詞をとる主文と従属節に焦点をあて、古代語が「統語的能格言語(Syntactically Ergative Language)」に共通する形態的・統語的特徴があることを示す。まず、１章で能格言語の一般的特徴について述べ、２章から古代語の能格性について考察する。Dixon (1994)に従い、A を他動詞の主語、S を自動詞の主語、O を他動詞の目

* 本論文はワークショップで行った口答発表の要旨をまとめたものである。 本ワークショップで発表の機会を与えてくださった井上和子、長谷川信子両先生はじめ、本研究を始めるにあたり、加藤泰彦、金水敏、黒田成幸、近藤泰弘、宮川繁、本橋辰至、John Whitman、各先生方から大変貴重な助言をいただいた。この場を借りて感謝の意を評したい。内容、表記に関する誤りはすべて筆者の責任である。

的語とし、対格言語と能格言語の違いを(1)に示す。

(1)



対格言語はAとSが形態的に主格標示され、目的語Oは対格標示を持つ。一方、能格言語はSとOに絶対格が与えられ、他動詞の主語Aは能格標示される。さらに、能格言語には格システムにおいて、アクティブ・タイポロジー(active typology)を持つ言語がある。(2)はBittner and Hale (1996)から引用した。

(2) Bittner and Hale (1996)

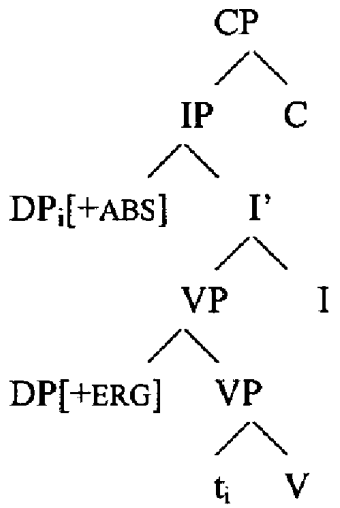
Case System	Agt-Pat-V	Agt-V	Pat-V
Ergative	Erg-Abs	Abs	Abs
Ergative-Active	Erg-Abs	Erg	Abs

能格アクティブ言語(Ergative-Active)では、自動詞は動作動詞と非動作動詞の主語に対して異なる格標示が与えられる。動作動詞は他動詞の主語と同じ能格表示が与えられ、非動作動詞は他動詞の目的語と同じ絶対格標示が与えられる。一般に動作動詞は非能格自動詞（unergative verbs)、非動作動詞は非対格自動詞（unaccusative verbs）に対応する。能格言語はさらに、「形態的能格言語」と「統語的能格言語」に区分される。(Dixon 1994 参照) 形態的能格言語は形態的格標示だけに能格システムがあらわれ、文法的には対格言語と同様に他動詞の主語Aと自動詞の主語Sが同じ特徴を共有する。統語的能格言語は形態的特徴だけでなく文法的特徴においても能格システムをもつ。統語的能格言語はオーストロネシア語族に多く見られ、自動詞の主語Sと他動詞の目的語 O がいくつかの文法的特徴を共有することが知られている。(Aldridge 2004 参照) 本論文ではそのうち格付与に焦点をあて古代語の能格性について考察する。

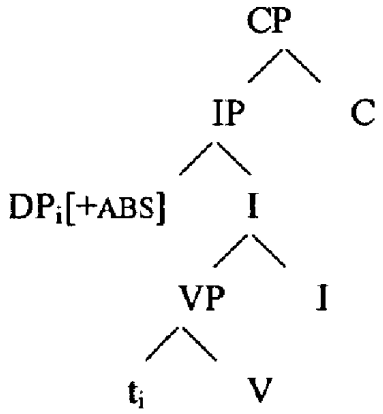
Bittner and Hale(1996)はGB理論の統率(government)の概念を用い、統語的能格言語では、絶対格句S/OはCompから格付与されるために、Spec(IP)に移動すると提案している。一方、形態的能格言語は対格言語と同様に目的語は動詞句内で動詞から格付与される。いずれの言語も能格句Aは動詞句内の外項主語位置に生成され機能範疇IPへの移動が起らない。すなわち、対格言語はS/AがIPへ移動するのに対し、統語的能格言語はS/OがIPへ移動する。以下に統語的能格言語の構造を示す。

Bittner and Hale (1996)

(3) a. Transitive



b. Intransitive



例えば、(4)で示すジルバル語(Dyirbal)は統語的能格言語に属し、基本語順はSOVである。しかし、(4a)で示すように他動詞では目的語は主語に先行する。

Dyribal (Dixon 1994:161)

(4) a. nguma yabu-nggu bura-n
father.ABS mother-ERG see-NONFUT
'Mother saw father.'

b. yabu banaga-ny-u
mother.ABS return-NONFUT
'Mother returned.'

(4a,b)はそれぞれ(3a,b)の構造に対応し、絶対格句 S/O は Spec(IP)へ移動し、Comp から格が付与される。以下で古代語の能格性について考察する。

2 文タイプ

主文には主題化やフォーカスなど特徴的な言語現象が現れるが、こうした現象は必ずしも主文に限定されているわけではない。従属節の中にも主文現象が現れることはよく知られている。例えば、(5)で示すように「ト」節内、「ノデ」節からの主題化は可能であるが、関係代名詞節内に主題は生起しない。

(5) a. 太郎は二郎はその本を買ったと思った。
b. 太郎は本をなくしたので、二郎が怒った。
c. *太郎は二郎は買ったその本を読んだ。

英語でも同様に、that 節、理由を表す because 節からの主題化、疑問化は可能であるが、関係代名詞節からの抜き出しはできない。(6-8)に例文を示す。

(6) a. Which book do you think that I bought?
b. That book, you think that I bought.
(7) a. Which book were you unhappy because I bought?
b. ?That book, I was unhappy because he bought
(8) a. *Which book did you see the person who bought?
b. *That book, did you see the person who bought?

古代語では、複雑名詞構文では主題「ハ」は現れないが、接続助詞「ニ」が順接・逆接を表すときは連体節内に主題「ハ」があらわれる。

(9) a. 春の雨はいや頻降るに、梅の花いまだ咲かなく(MY 786)
b. 家人は待ち恋ふらむに、遠の国いまだも着かず(MY 3688)

本研究では主文現象という観点から連体形動詞に焦点をしぼり、主題

「ハ」など主文現象が生起する節を主文とみなし、主文は常に定形節(finite clause)であり、「ハ」が生起しない関係代名詞節を含む複雑名詞構文を連体節と呼び、古代語の連体節は非定形節(non-finite clause)であると提案し、２つの節内の構造的・形態的違いについて述べる。

(10) a. 主文:　　定形節
　　b. 連体節:　非定形節

統語的能格言語では絶対格が Comp から付与されることから絶対格付与は定形節に限られる。そのため、非定形節内は主語位置に PRO が生成され、自動詞のみが生起可能である。古代語でも S/O に対する絶対格付与は(10a)の定形節内のみで、(10b)の非定形節内では絶対格が付与されないことを後章で示す。

３．無助詞主語

Miyagawa (1989)は古代語では「ヲ」による形態格と動詞による抽象格の２つのタイプの格付与が可能であり、無助詞目的語は常に動詞に隣接し抽象格を付与されると提案している。

Miyagawa (1989)

(11) a. An object NP without the particle o must occur immediately adjacent to the verb.
　　b. If the object NP is overtly cased, it is free to occur virtually anywhere within the clause.

以下、古代語は自動詞主語 S が他動詞目的語 O と同様の構造的位置に現れることをみていく。まず 万葉集から動詞群を他動詞、動作自動詞、非動作自動詞に分け、無助詞主語の分布を調べた。動作自動詞は非能格自動詞、非動作自動詞は非対格自動詞に対応する。

(12) Verbs with Bare Subjects (cf. Yanagida 2005b)

Transitive verb (Agent, Experiencer)	Active Intransitive (Unergative)	Non-active Intransitive (Unaccusative)	
		Verb	Adjectives
34 (100)	18 (30)	95 (580)	38

左の数字は動詞の種類の数、()内は無助詞主語を明示的にとる動詞の数を表す。万葉集には無助詞主語を明示的にとる他動詞が約 100 例、動作自動詞約 30 例、非動作自動詞約 580 例ある。調査の結果、連体節内では非動作自動詞の主語は(13)で示すように常に動詞に隣接して現れる。このことは非対格自動詞の無助詞主語 S は Miyagawa(1989)が示した他動詞の目的語 O と同様に構造的に動詞に隣接した位置にあることを示す。一方、主文に現れる場合は(14)で示すように隣接条件を満たす必要はない。

連体節 (非対格自動詞)

(13) a. 夕さらず河蝦鳴く瀬 (MY 356)

b. 泊瀬の山は真木立つ荒山道 (MY 45)

主文（非対格自動詞）

(14) a. 萩の花今か散るらむ (MY 2118)

b. 鴫(しぎ)誰が田にか住む (MY 4141)

他動詞では無助詞主語はいくつかの例外を除いてつねに主文に現れる。(15)に例文を示す。（Yanagida (2005b)で他動詞の無助詞主語が連体節に現れる例が 5 例あることを示した。）

主文(他動詞)

(15) 千鳥何しかも川原を思ひいや川のぼる (MY 1251)

他動詞の無助詞主語が主文に限定されるという事実から無助詞主語は主題の「ハ」が省略され、構造的には IP 領域に基底生成されていると

仮定する。一方、動作自動詞が無助詞主語を取る例３０例のほとんどは終止形、あるいは連用形動詞であり、連体形は見られない。以下終止形の例をあげる。

(16)　人の見て言とがめせぬ夢に<u>われ</u>今夜至らむ (MY 2912)

以上の観察から(17)の仮説を提案する。

(17)　仮説 I：他動詞、非能格動詞に現れる無助詞主語は主題(topic)であり Spec(IP)に基底生成されている。

仮説 II：非対格自動詞の無助詞主語は連体節内では常に動詞に隣接する。

無助詞主語の構造的違いを(18)に示す。

(18) a. Transitive/Unergative (Finite)　　b. Unaccusative/Object of Transitive (Non-Finite)

動作自動詞の無助詞主語は他動詞同様に主文に限られることから、無助詞主語は IP に基底生成されていると考える。一方、連体節内では非対格自動詞の主語 S は目的語 O と同様に動詞に隣接する。さらに、非対格自動詞の主語は(19)で示すように目的語と同様に「ヲ」で標示することができる。

(19)　夜並べて<u>君を</u>(乎)来ませとちはやぶる神の社を祈まぬ日は無し (MY 2660)

Vovin (1997)は古代語の「ヲ」が目的語と非動作動詞の主語を標示することから古代語の「ヲ」は絶対格であると提案した。本研究では、

Yanagida (2006)に従い、「ヲ」で格標示されたS/Oは動詞句の外へ強制移動することを提案する。すなわち、古代語には動詞句内で動詞に隣接して現れる無助詞目的語と「ヲ」で表示され動詞句外へ強制移動する２つのタイプの目的語が存在する。　古代語が統語的能格言語であるという仮説が正しければ、動詞句の外へ強制移動する「を」で表示されたS/Oに絶対格が付与されるはずであるが、その場合動詞に隣接しているS/Oの格付与が問題になる。この問題を５章で扱う。

４．能格

無助詞主語の分布から古代語は動作動詞と非動作動詞が異なる格パターンをもつ能格アクティブ言語に属するということが言える。主文では動作動詞の主語は無助詞で現れるが、従属節においては(20a-b)で示すように属格「ガ」で標示される。

(20) a. 里長が(我) 課役徴らば... (MY 3847)
　　b. 君が(之)行く海辺の宿に霧立たば... (MY 3580)

「ガ」は動作動詞の主語を標示し、非動作自動詞の主語を表示しない。これは古代語の「ガ」が主格ではなく能格として機能していたことを支持する。

(21) (Yanagida 2005b)
　　仮説: 古代語では属格「ガ」は能格を付与する。

Vovin (1997)は格助詞「イ」は(22a-b)で示すように動作動詞の主語に使われ、非動作動詞の主語に使われないという事実から「イ」は動作格(active case)であると提案した。しかし万葉集では格助詞「イ」は５例だけである。

(22) a. 菟原荘士(うはらをとこ)<u>い</u>天仰ぎ叫びおらび (MY 1809)

　　b. 紀伊の関守<u>い</u>留めてむかも (MY 545)

Dixon (1994)によれば、能格性は必ずしも名詞の格として標示されるだけではなく、動詞の接辞に現れる言語もある。万葉集では「イ」が接頭辞として動詞に接辞している例が少なくても７３例ある。そのほとんどが動作動詞に接辞している。「イ」が非能格動詞「行く」に接辞する例は２８例あるが、非対格動詞「来る」に接辞化する例は一例もない。この事実から接頭辞「イ」が能格と形態的に関連していると言える。(Yanagida 2005b 参照)

接頭辞「イ」(73 例, 「行き」28 例)

(23) a. 奈良の京の佐保川にい行き至りて (MY 79)

b. 久米の若子がい触れけむ磯の草根 (MY 435)

なお、(24)で示すように「イ」が非動作動詞に接辞化されるいくつかの例外があるが、これは「山」や「川」などの主語が擬人化される和歌の特徴による。擬人化されることにより、主語が動作主と解釈され、「イ」の接辞化が可能になると思われる。

(24) 三輪の山あをによし奈良の山の山の際にい隠るまで道の隈い積るまで (MY 17)

格助詞「イ」は平安初期の訓点資料に数多く見られることが知られている。(25)に、『西大寺本金光明最勝王経』から例をあげる。

(25) 『西大寺本金光明最勝王経』における格助詞「イ」

a. 我レい難思の智が境を能ク通達せる (春日 1969:155)

b. 長者子流水い、其の子に告げて言はク（春日 1969:180）

『西大寺本金光明最勝王経』に格助詞「イ」は 100 例近くあるが、「イ」は属格「ガ」と同様に他動詞と動作自動詞の主語を標示し、非動作動詞の主語を標示しない。

5 語順の制約

5.1 「ヲ」について

5章では語順の問題について述べる。古代語では他動詞の主語と目的語が明示的に格標示される場合、常に「ヲ＞ガ」の語順をとる。[1] 現代語の「ガ＞ヲ」構文は万葉集に2例のみで例外と言えるであろう。(Yanagida 2006 参照)

(26) [NP ヲ NP ガ・ノ・_V]....60 例 (28 連体形)

a. 秋山を(乎)いかにか君が(之)独り越ゆらむ (MY 106)

b. 吾が手を(乎)今夜もか(毛可) 殿の若子が(我) 取りて嘆かむ (MY 3459)

(27) [NP ガ NP ヲ V]...2 例

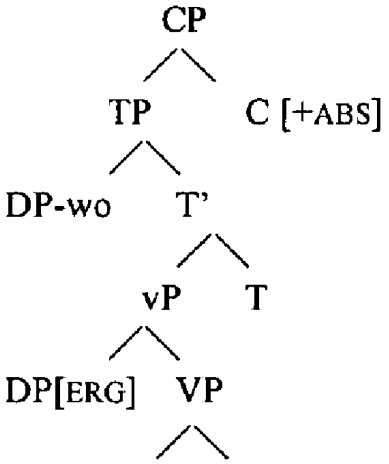
a. 佐用姫が(何)この山の上に領布を(遠) 振りけむ (MY 872)

b. ここだくに君が(我)見せむとわれを(乎) 留むる (MY 4036)

Yanagida (2006)の観察から古代語では「ヲ」で格標示された目的語は動詞句外へ移動しなければならない。能格言語では能格句は外項主語元位置から移動しないと言われている。(Bittner and Hale 1996 参照)「ガ」句が「ヲ」句に先行しないという事実は古代語が能格言語であることを示唆する。すなわち(26)は(4a)で示したジルバル語と同じように、目的語は Spec(TP)へ移動し、Comp から格付与されると提案する。(26)の構造を(28)に示す。

[1] Kinsui (2002)でも語順の制約に関して同様の指摘がされている。

(28) Transitive



(26)のパターンは全 60 例のうち連体節に現れる 1 例の例外を除いてすべて主文に現れる。[2] このことから(26)を主文の現象ととらえ、格標示された目的語は常に移動し、Comp から格付与される。

5.2 無助詞目的語

無助詞目的語は常に動詞に隣接し、主語が明示された文は 100 例ある。そのうち 60 例が連体形である。(Yanagida 2006 参照)

(29) [NP ノ・ガ NP-Ø V] ...100 例 (60 連体形)

a. 野守は見ずや君が(之)袖ふる (MY 20)

b. 佐用比売(さよひめ)の子が(何) 領巾振りし山の名 (MY 868)

(29)のパターンは(26)とは明らかに異なり、その多くが複雑名詞構文に現れる。Bittner and Hale(1996)の仮説に従えば、統語的能格言語では絶対格が Comp から付与されるために、動詞句内の目的語 O、非対格自動詞主語 S は動詞句内の元位置から格付与のため IP への移動が義務づけられる。しかし、古代語の無助詞目的語は常に動詞に隣接してあらわれる。さらに重要なのは(29)の 100 例のうち 94 例で目的語は名詞一

[2] (9)で示したように逆接・順接「に」で標示される定形節も、[NP ヲ>NP ガ/ノ V]構文が可能である。以下例をあげる。

(i) つぎねふ山城道を(乎)他夫の(乃)馬より行くに (MY 3314)

語である。また連体形動詞 60 例のうち 59 例が名詞一語である。この事実により、隣接している目的語は Baker (1988)に従い、動詞に付加され編入(Incorporation)することにより自動詞化されると提案する。Baker(1988)によれば、編入された名詞は格付与される必要がない。

非対格自動詞の主語の分布をみると(18b)で示したように目的語同様に常に動詞に隣接しているため、主語 S は目的語の基底位置から移動しないと考えられる。非対格主語 S は元位置から格付与のため移動しなければならないが、Bittner and Hale(1996:37)は、能格言語の非対格主語 S が元位置から移動しない場合、外項主語位置に there などの明示的あるいは暗示的な虚辞(expletive)が現れ、元位置の主語は動詞に編入されるという一般化が成り立つと指摘している。古代語でも目的語同様に非対格自動詞主語 S が序詞として文頭にあらわれる例- 文法的には主題とみなす- をのぞき、動詞句内で隣接している場合もほとんどが一語である。ここでは古代語の構造(18b)において、動詞に隣接している S/O は共に動詞に編入され格付与をされないと提案する。

(30) 仮説:動詞句内の非対格主語 S と他動詞目的語 O は動詞に編入(Incorporation)する。後者はこの操作により自動詞化される。

(30)により、古代語では連体節内では格付与されず、格は常に主文の Comp から付与されることが支持される。(29)は主語が能格標示されているが、自動詞化された構文である。能格言語に共通する「反受動態(Antipassive)」に目的語が動詞に編入し自動詞化する構文がしばしば観察される。そして能格から対格言語への格システムの変化は一般にこの反受動態の再分析(reanalysis)により、反受動態が他動詞化され格システムが分裂することに起因すると言われている。(29)は反受動態の再分析により他動詞化される過程の構文であると提案する。

本論文では、連体形動詞に焦点をあて、定形節と非定形節内の格付与の違いについて考察した。古代語の統語的能格性について以下にまとめる。1）属格「ガ」は能格を付与する。2）接頭辞「イ」は形態的に能格に関係している。3）定形節内では「ヲ」で標示される目的

語 O と非対格主語 S は移動し Comp から絶対格を付与される。4）非定形節内では無標示名詞は格付与されない。

参考文献

Aldridge, Edith. 2004. *Ergativity and Word Order in Austronesian Languages*. PhD dissertation. Ithaca, NY: Cornell University.

Baker, Mark, C. 1988. *Incorporation*, The University of Chicago Press, Chicago.

Bittner, Maria and Ken Hale. 1996. The Structural Determination of Case and Agreement. *Linguistic Inquiry* 27, 1-68.

Dixon, R.M.W. 1979. Ergativity. *Language* 55, 59-138.

Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity*, Cambridge University Press, Cambridge.

春日政治. 1969.『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』勉誠社

Keenan, Edward. 1976. Remarkable Subjects in Malagasy. In Charles Li (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press. New York, pp. 249-301.

Kinsui, Satoshi. 2002. On the Nominative and Accusative Case Markers in *Manyoshu*. Handout, in Kuroda (2005).

Kuroda, S.-Y. 2005. On the Syntax of Old Japanese. A revised version of a paper presented at the Second Linguistics Seminar-International Symposium: the History and Structure of Japanese, held at St. Catherine's College, Oxford, Kobe Institute, September 29, 2004, Kobe.

Miyagawa, Shigeru. 1989. Historical Development of the Accusative Case Marker.. Chapter 6, *Syntax and Semantics: Structure and Case Marking in Japanese* 22, Academic Press, New York.

Motohashi, Tatsushi. 1989. Case Theory and the History of the Japanese Language. PhD dissertation, University of Arizona.

中西進. 2002. 『万葉集（1-4）』 講談社文庫

Vovin, Alexander. 1997. On the Syntactic Typology of Old Japanese. *Journal of*

East Asian Linguistics 6, 273-290.

Yanagida, Yuko. 2005a. *The Syntax of Focus and Wh-Questions in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective*, Hituzi, Tokyo.

Yanagida, Yuko. 2005b. Ergativity and Bare Nominals in Early Old Japanese. A paper presented at Workshop on Theoretical East Asian Linguistics, Harvard University, Cambridge. July 23, 2005.

Yanagida, Yuko. 2006. Word Order and Clause Structure in Early Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15, 37-67.

305-8571
つくば市天王台 1-1-1
筑波大学人文社会科学研究科

yanagida@sakura.cc.tsukuba.ac.jp